

## 統合失調症の闘病記のテキストマイニングと伝記分析と ナラティブ教材化への展望

小平朋江<sup>\*1)</sup> 伊藤武彦<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学 <sup>2)</sup>和光大学

【問題と目的】入院中心医療から地域で当事者が生活する支援という精神看護学での理論と実践の変化がある。統合失調症は学会による病名変更が2002年になされ家族や当事者の意識が大きく変化している。Peplau理論の流れをくむBarkerは、Tidal Modelで当事者にとって重要なのは、自分の「物語りを取り戻し、生活を回復する」ことと述べた。当事者の物語りは、精神看護学にとって重要な課題であるが研究は進んでいない。闘病記には当事者援助機能があることも指摘され、看護教育への活用もされている（門林他，2007；岡本・長谷川，2007）。がん看護の分野では当事者の語りを文章と動画でホームページで紹介する英国のDIPEXの取り組みは、患者や家族だけでなく、医学教育にも利用され、日本でもDIPEX-Japanにより乳がんと前立腺がんのウェブサイトが完成している。統合失調症ではJPOP-VOICEのサイトがある。本研究では、語りを内容的に分析する質的研究とテキストマイニングによる量的研究とを結合させ、統合失調症の当事者と家族の物語りの内容と構造を分析することで病いと回復のプロセスを明確化し、さらにはナラティブを教材化することを展望するのが目的である。

【対象と方法】本研究では、複数の統合失調症の闘病記を対象として個人の生き方のプロセスを伝記分析などに依拠した質的分析と、テキストマイニングソフトを使った量的分析を行なう。古川奈都子（2001）の『心を病むってどういうこと？：精神病の体験者より』は、優れた闘病記であると言える。本研究では、テキストマイニングの手法を用いて2009年度から取り組んでいる分析をさらに深め、その構造を量的に分析し、病いの語りの構造を質的分析ではなく量的な根拠に基づいて明らかにする。

【結果と考察】分析を深めて各章ごとの特徴を見ることで、自分の体験の告白だけでなく、周囲の人や一般社会に対して理解を求めるポジティブで具体的なメッセージがあることを確認した。本書のような体験者の物語りと積極的な意見が統合されている闘病記は、当事者や家族だけでなく広く一般の人々にも偏見を無くしたり、つきあい方法を知る教育効果がある。このような闘病記は、ナラティブ教材として間接的に当事者の体験や生きる姿を知る事が出来ることから精神看護学の教育に有効に活用されるべきであると示唆され、看護教育での活用可能性も展望できた。その成果を受けて、講義の中での活用方法など実際の教材化への試みへと発展させた。

【上記の成果を踏まえ今後の課題】2010年度は講義で実際にナラティブ教材を活用し、看護学生150名に対して自由記述によりナラティブ教材の効果について調査を行った（聖隷クリストファー大学倫理委員会の審査を経て実施：認証番号10039）。この結果は、テキストマイニングによる分析が進行中である。

【闘病記を分析した研究成果は以下の雑誌に掲載】

小平朋江・いとうたけひこ・大高庸平 2010 統合失調症の闘病記の分析：古川奈都子『心を病むってどういうこと？：精神病の体験者より』の構造のテキストマイニング 日本精神保健看護学会誌，19(2)，10-21。（発行：2011年1月30日）